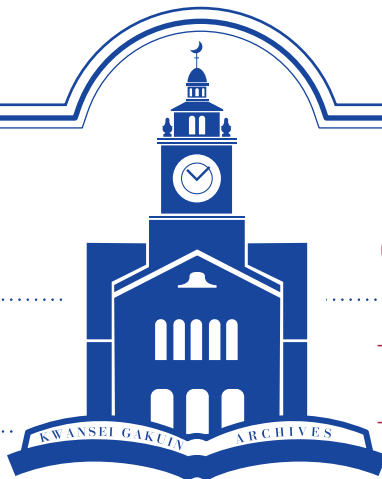


Kwansei Archives



Gakuin Newsletter

学 院 史 編 纂 室 便 り

No.

60

特集：5人の院長

2025・秋学期

1 初代院長 W. R. ランバスと中国

趙 怡
関西学院大学経済学部教授

2 第2代院長 吉岡美国のアメ리카時代

赤江 達也
学院史編纂室長

3 エディンバラにおける J. C. C. ニュートン宣教師

神田 健次
学院史編纂室顧問

4 第4代院長 C. J. L. ベーツ——ベーツ日記より

ベネディクト テイモシー
関西学院宣教師

5 第5代院長 神崎驥一——日米日本人会書記長時代

井上 琢智
学院史編纂室主任研究員

6 関西学院 5人の院長

学院史編纂室

初代院長 W. R. ランバスと中国

関西学院大学経済学部・言語コミュニケーション文化研究科教授

趙 怡

関西学院は中国との縁が深い。創始者ランバス（Walter Russell Lambuth, 1854-1921）は上海に生まれ育ち、「KWANSEI」という校名の読みも、隋唐時代の主に長安地方の発音で日本の漢音の原音でもあったため、彼が選んだものという。当時の中国語新聞に寄稿された氏の記事からもその漢文造詣の深さが窺える。

戦乱のなかでの誕生、上海で過ごした日々

上海はアヘン戦争により開港され、それに伴い西洋各国による宣教活動が始まる。1854年9月、アメリカ南メソヂスト監督教会の宣教師 J. W. ランバスと妻メアリーは、4ヶ月以上もの過酷な船旅を耐えた末上海に到着したが、「街は戦と混乱の真っ最中にあり、上陸してすぐに砲声が四方八方から聞こえてきた。都市はすでに反乱者の手に落ちていた」（J. W. Lambuth, 1877）。太平天国の一派である「小刀会」が県城を占領し、大量な難民が城外の租界に流れこむ時期だった。2ヶ月後の11月10日、W. R. ランバスが誕生した。上海はその後も太平天国軍からの攻撃や疫病の流行に遭い、祖国には南北戦争も起き、一家は10年もの間に戦乱と貧困に苦しめられた。

「鄭家木橋」のそばにあるランバス家の住居は、フランス租界に位置し、上海県城に近い。ランバスは誕生から5歳までの幼年期、10歳から15歳までの少年期、そして青年期の数年間をここで過ごした。布教活動の傍ら、貧しい人々の看病と教育に尽力する両親のもとで、ランバスは中国人の子供と混じって育ち、中国語で話すことの方が多かった。学校教育はアメリカで受けたものの、彼の中国理解の原点は「鄭家木橋」にあり、上海は故郷であった。のちに医療宣教の道へ進めたのも、そこにいる病気に苦しむ人々を救うためだった。

中国人に愛された「藍華徳医師」と「藍華徳会督」

1877年、アメリカの大学を卒業した23歳のランバスは、新妻を連れて上海に戻り、「藍華徳医師」として活動を開始した。田舎を巡回して医療を施し、上海の西北（「郊外」ではない）に位置する南翔に診療所も開設。また1881年の渡米を機に米英の一流大学病院で解剖学、生理学、眼科の研究も進めた。翌年の末に友人で医師の W. H. パークを連れて上海に戻ったランバスは、早速蘇州に赴き、一年後に「博習医院」（現・蘇州大学附属第一医院の前身）を

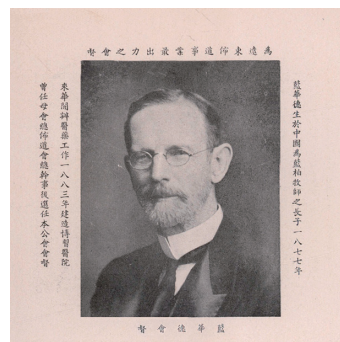
開業した。内地においては中国初の近代的な病院であり、内科、外科、眼科、手術室、病室のほか、アヘン中毒治療所も設置された。二人の若き医師は、6名の中国人の助手と共に診療に当たり、医学生も多く育った。ランバスが病院を離れた後、パークは院長になり（のちにランバスの妹ノラと結婚）、1927年帰国するまで「柏楽文」の名で中国の医療と教育に生涯を捧げた。

1884年、ランバスは家族と共に北京に移り、医療宣教を続けた。その後日本に渡り、1889年に関西学院を創設して初代院長になったことは周知の通りである。

1907年4月、モリソン来華宣教百周年の記念を兼ねて上海で全国宣教師大会が開かれ、ランバスも南メソヂスト監督教会の全権代表として出席。その間、土地売買をめぐる長年揉めていた浙江省の「湖州事件」をパークと共に仲裁した。教団が現地民の土地を半ば強奪することに反発して宣教師の殺害と教会の破壊を伴う「教案」が各地で頻発したなか、法律を通して解決できた稀な成功例だった。中国語と中国の事情を熟知し、土砂降りのなか泥道を歩いて現場に赴き、じっくり双方の意見を聞いたランバスとパークであればこそ得られた結果である。

1910年にビショップ（「会督」）に選出されたランバスは、1919年、自ら東洋地区伝道の担当監督となり、以降毎年この地域を訪問した。常に現地の人々に寄り添い、1920年には中国北方の飢饉地帯を視察して多くの募金を集めて被災地域に送った。その姿は真の友として人々の目に映ったに違いない。

1921年9月、ランバスが訪日中に逝去した際、多くの人々が哀悼の意を捧げた。遺体は上海に運ばれ、ムーア記念堂（現・沐恩堂）にて厳かな追悼式が行われた後、八仙橋にある外国人墓地の母の傍に埋葬された。（ちょう い）



『中華監理公会年議會五十週記念刊』（1935年、上海圖書館所蔵）に掲載された「藍華徳会督」の肖像。上には「為遠東布道事業最出力之會督」と書かれている。

* ランバスと中国については、拙稿「上海と周辺地域における W・R・ランバスの活動」（大学リポジトリ所載）なども参照されたい。

第2代院長 吉岡美国のアメリカ時代

関西学院大学社会学部教授・学院史編集室長 赤江 達也

吉岡美国^{よしくに}（1862-1948）は、1892年から学院史上最長の23年間にわたって第2代院長を務め、関西学院の基礎を築いた。30歳の若さで院長に就任する前の2年間（1890-1892）、吉岡はアメリカ合衆国南部テネシー州ナッシュヴィルのヴァンダビルト大学に留学している。

留学1年目の様子については、これまでも大学の友人・尹致昊^{ユンチホ}（1865-1945）の日記を通じて知られてきた。¹ここでは、留学2年目について新たな資料からわかってきたことを紹介したい。

アメリカでの講演旅行——新聞記事から

留学1年目が終わった1891年の夏休み、吉岡はテネシー州から東へと向かい、ノースカロライナ州各地のメソヂスト教会で講演を行っている。同世代の内村鑑三（1861-1930）が『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』で書いているように、当時のアメリカのキリスト教会では異教国の改宗者への関心が高かった。

現地の新聞によれば、吉岡は1891年8月30日の日曜日、ノースカロライナ州の州都ローリーの中心部にあるエデントン・ストリート教会で朝と夜に登壇している。²

朝の礼拝では、日本伝道の状況を語った。日本は新しく実り多い宣教地域であり、多くのキリスト教団体の働きによって魂の救済と道德生活の向上が実現されつつある。だが、国民の多くはいまだキリスト教を知らないとして、日本伝道への共感と援助と祈りの必要を訴えた。

夜の講演会では、日本の習俗や文化を紹介した。日本から持参した伝統的な衣服（羽織袴や履物）を身に着けて登壇した吉岡の講演は、州都ローリーで期待しうる最大規模の聴衆を喜ばせ魅了したという。その後も、ノースカロライナ州でさらに1、2回の講演を行ってから、ヴァンダビルト大学に戻って新年度を迎えている。

新聞記事では、吉岡の英語がくりかえし称賛されている。また、記事の末尾では、吉岡がもう1年間、ヴァンダビルト大学の神学部で学んだ後、南メソヂスト監督教会の宣教師として母国日本に帰って活動する予定であることが報じられている。

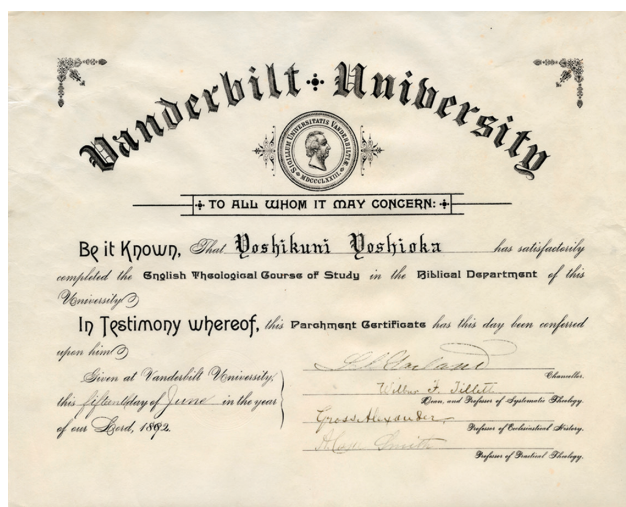
ヴァンダビルト大学の卒業式——卒業証書と式次第から

2023年9月9日、吉岡美国の令孫 吉岡美和氏^{よしかず}から関西学院に対し、吉岡美国の遺品をご寄贈いただいた。そのなかに、ヴァンダビルト大学の卒業証書や式次第が含まれていた。これらの新資料によって、これまで吉岡の履歴書の簡潔な記載以上には知られていなかった卒業（式）の詳細がみえてきた。

吉岡は1892年6月15日の水曜日に、ヴァンダビルト大学を卒業する。卒業式は午前10時から挙行された。礼拝堂に入場すると、まず祈祷がささげられ、次いでオーケストラによる演奏を挟みながら、学生らの代表4名がスピーチを行った。その後、卒業証書とメダルの授与があり、祈祷によって式が閉じられている。

この日、吉岡が授与された卒業証書には、ヴァンダビルト大学神学部（the Biblical Department）の英語神学専攻（the English Theological Course）を修了したことが記されている。卒業証書の右下には、総長ランドン・ガーランド（Landon Garland）とともに、組織神学・教会史・実践神学の教授3名が署名している。

こうして吉岡美国は、初代院長 W. R. ランバスの出身校でもあるヴァンダビルト大学で神学を修め、学位を得て卒業する。そして翌7月に帰国すると、同年9月に関西学院の第2代院長に就任するのである。（あかえ たつや）



吉岡美国のヴァンダビルト大学卒業証書

1 尹致昊（木下隆男訳注）『尹致昊日記2』（東洋文庫、平凡社、2022年）。

2 The News and Observer, Sunday, August 30, 1891. および The News and Observer, Tuesday, September 1, 1891.

3 本稿で言及した史資料については、今後、『関西学院史紀要』においてあらためて紹介したい。

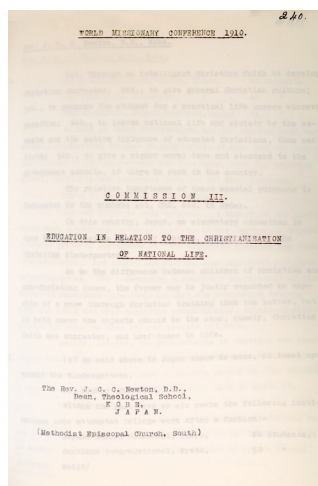
エディンバラにおける J. C. C. ニュートン宣教師



関西学院大学名誉教授・学院史編纂室顧問 神田 健次

エディンバラ世界宣教会議

ジュネーブに本部を置く世界教会協議会（WCC）の委員を長年務めていた関連で、10年ほど前にそのアーカイブズでの資料調査に訪れた時、J. C. C. ニュートン宣教師がエディンバラ世界宣教会議において提出した報告書（A4サイズで9頁）を発見し、大変驚いた。現代のエキュメニカル運動の嚆矢と呼べる画期的な世界会議にニュートン宣教師が積極的に参与し、貢献していたのである。1910年にエディンバラにおいて開催された世界宣教会議には1200名以上の代表が集い、宣教の多彩な諸問題を集中して協議し合った。エディンバラ宣教会議は、第一分科会 全世界への福音の使信、第二分科会 宣教地における教会、第三分科会 国民生活のキリスト教化に関連する教育、第四分科会 他宗教に対する宣教の使信、第五分科会 宣教師の養成、第六分科会 宣教の基礎としての教会、第七分科会 宣教と政府、第八分科会 協力と一致の促進、とい



ニュートン宣教師提出の報告書（WCC 所蔵）

う八つの分科会で構成されていた。この中で「第二分科会 宣教地における教会」には、関西学院創立者の W. R. ランバス宣教師が南メソヂスト監督教会の監督として参与し、その副議長に任命されて重要な指導的役割を果たしている（拙稿「草創期のエキュメニカル運動と W. R. ランバス」『関西学院史紀要』18号、2012年を参照）。

策を打ち出すことに言及している。この背景には、1899（明治32）年に「文部省訓令第12号」によって宗教教育を禁じる法令が発令され、キリスト教主義学校にとっては存立をおびやかす政府の圧迫に他ならなかった。キリスト教教育を続けることは、上級学校への進学や徴兵猶予の特典を失うことになり、男子校にとっては死活問題でもあった。この訓令は、国内外の批判によって実質的に効力を失ってゆく中、関西学院でも認定に向けて文部省との交渉が進められ、1909年に神学校と普通学部が文部大臣より認定された。その意味でこの問題は、ニュートン宣教師にとってキリスト教主義の精神を守り抜く厳しい闘いを意味していたと言える。

キリスト教総合大学の構想

もう一つは、「キリスト教総合大学（Christian University）の構想」である。ニュートン宣教師は、キリスト教主義教育の高等教育に言及しつつ、キリスト教総合大学を建設することは「この国における宣教政策の未解決な問題の一つ」とであると述べ、「エディンバラ会議は、それを解決する手助けをしてくれることを期待している」と要望しているのである。このキリスト教大学構想に言及した背景には、エディンバラ宣教会議の前年、1909年10月に開催された開教50年記念会において採択されたキリスト教大学の設立に関する決議があったのであった。即ち、「実ニ日本ニ於ケル基督教ノ将来ハ現在ノ諸基督教学校ノ設備ヲ拡張スルト為ザルトニアリ。加之更ニ緊要ナルハ名実相適エル基督教大学ヲ速カニ設置スルニアリ」という決議文が可決されている。第三分科会の報告書（Report of Commission III. Education in Relation to the Christianisation of National Life, Edinburgh and London, 1910.）では、日本の場合、キリスト教主義学校が成功した現況について報告され、日本のキリスト教教育の全体な評価として、「キリスト教主義学校は、日本のキリスト教化において計り知れないほど重要な役割を果たしてきたし、これからもできるであろう」と、積極的な評価が強調されている。また、日本のような「教育が重視されている所では、大きな戦略的中心にキリスト教総合大学が据えられるべきだ」と叙述されている。ニュートン宣教師が要望したキリスト教総合大学構想について、公式報告書に色濃く反映されているのである。

（かんだ けんじ）

政府の教育政策とキリスト教主義学校

ニュートン宣教師は、元来エキュメニカル運動へ強い関心をもっていた。エディンバラ宣教会議に参加した時は、ニュートン宣教師は関西学院の神学部長であった。ニュートン宣教師は、その報告書の中で日本におけるキリスト教教育の状況と課題について多岐に亘って論述しているが、ここでは二点に絞って述べたい。一つは、政府の教育政策とキリスト教主義学校の関係についてである。「政府は、宣教協会の目的を促進すると同時に阻止しようとする」と述べ、特に阻止する局面では、宗教教育に対して厳しい政

第4代院長 C. J. L. ベーツ

——『ベーツ日記』より

関西学院宣教師・関西学院大学社会学部准教授

Timothy O. Benedict



ベーツの自己評価

第4代院長 C. J. L. ベーツが1920年から1940年まで関西学院を導いた時代は、原田の森から西宮上ヶ原キャンパスへの移転、関学生が愛する「Mastery for Service」のモットーの提唱など、今日の学院の礎を築いた大事な時期であった。しかし、彼自身がどう自分の働きを捉えていたのか、彼の日記からは意外な一面が浮かび上がってくる。ベーツは1936年5月26日、59歳の誕生日に次のように日記で振り返っている。「教育者や大学の運営に携わる者としては、それなりの成果をあげてきたかもしれない。けれども、人の魂をキリストへと導く者として、人を釣る漁師として、あるいは人の人生を変える者としては、自分は失敗してきたのだとを感じるようになった」。このように学院史に名を残し尊敬されてきたリーダーが、日記では自らの宣教活動については極めて厳しい自己評価をしていた。

「ベーツ日記」について

この日記は、背広の内ポケットに収まるほどの小さなノートに、ベーツの力強い筆跡でぎっしりと書き込まれている。表紙には Guidance Book & Diary とあり、その内容は主に信仰生活についてである。「Guidance (導き)」は、当時ベーツが熱心に参加していたキリスト教運動 Oxford Group Movement の特別な用語であり、毎日の黙想や祈り、いわゆる Quiet Time を通して神の導きに耳を傾けることを意味していた。この「導き」が日記の中心テーマであり、そこには家族の健康、日本における宣教活動、そして差し迫る戦争への不安についての思いや祈りなどが記されている。日記は1935年から1942年まで、院長として務めた最後の5年間とカナダに帰国した後の2年間を含んでいる。日記を始めた前年の1934年にはベーツ自身が静脈炎と血栓症により半年間療養を余儀なくされ、同年妻ハッティも脳溢血で言葉を失い、半身不随となっていた。それ以前から日記を書いていたのかは定かではないが、1935年から始まっていることを考えると、困難を経た直後から新しい習慣として書き始めた可能性は高い。

ベーツの素顔

日記にはベーツの性格や信仰上の葛藤、自らの失敗や弱さを包み隠さず記している。例えばお金の管理が苦手だったベーツは次のように反省している。「神よ、金銭面での

不注意、宣教団体の会計担当者に心配をかけたこと、そして私が招いた赤字をどうかお赦してください。より良く努められるようお助けください……しかし私は誰をも騙したことはありません。宣教団体や学校を欺いたことはありません。ただ帳簿の管理が面倒に感じられただけです」(1935.10.3)。ここからは、ベーツの誠実さと自己認識の深さがうかがえる。また、宣教への強い熱意を持っていたベーツは、その熱意に周囲がついて来られない時もあったようだ。「私はあまりに熱心すぎて、かえって人々の反感を買ってしまうのかもしれない。自分の子どもたちに私の訴えや生き方がほとんど受け入れられないのはなぜなのか理解できない。二次的なことに妥協しなすぎるのだろうか。あまりに強く迫りすぎ、無理に歩調を早めさせているのだろうか」。ここで彼の真面目な性格がよくわかる。特に彼が広めようとしていた Oxford Group Movement について学院の同僚からも支持を得られなかった時もあった。「なぜ私は、共に生活し働いている教員たちから全く支持を得られないのだろうか。昨日ベイジル・エントウィッスルが、『あなたが進めている運動に共に加わっている教員は何人いますか』と尋ねたが、私は『一人もいない』と答えざるを得なかった」(1936.8.22)。このように日記の行間からは、孤独感も度々漂ってくる。

最後まで諦めないベーツ

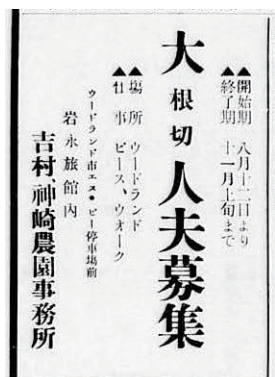
1930年代後半はベーツにとって熟年期の「黄金期」であるはずだった。しかし、健康問題や、戦争の影が関西学院と日本を覆いはじめるなかで、ベーツの悩みは尽きなかった。それでもなお、印象的なのは、ベーツが決して諦めず、自らの葛藤を神に従う決意へと変えていった姿である。ここに関西学院をリードしたベーツの強さが見える。困難のただ中で、彼は神の導きに耳を傾け続け、自分の進むべき道を常に見出そうとしていた。1940年5月26日にベーツは戦争の影響で余儀なく辞任をするが、翌週の1940年6月4日の日記の冒頭にこう呟いている。「人格とは、人生を貫く一つの目的を成し遂げることによって、全体として一つに形づくられるものである。」"Character is the unification of the personality through the achievement of a dominant purpose." ベーツ院長の日記を読み通す限り、関学への熱い愛は彼の生涯を貫く一つの目的であり、まさに彼の人格を統一し、形づくっていたものであった。

(ベネディクト ティモシー)

第5代院長 神崎驥一 ——日米日本人会書記長時代

学院史編纂室主任研究員（元経済学部教員） 井上 琢智

神崎驥一（1884-1959）は陳三・サタ夫婦の次男として岡山から一時離れた東京の麹町で生まれた。岡山県御野郡内田村（1889年に岡山に編入）で幼少期を過ごした。父の友人溝手文太郎牧師を通じて関西学院院長の吉岡美国に紹介され普通学部^{いぬいせいまつ}に入学した。その普通学部を乾精末らとともに1901年3月に卒業し、新設の英語専修科に4月入学し、1903年3月まで在籍した。その時代に渡米を志した。渡米後、1906年12月26日には王府の南美以教会クリスマス祝会司会、翌年5月14日の南美以連合親睦会（於：王府）での講演、1909年6月15日の青年会連合説教会で神学部卒柳原直人祈祷の司会、桑港の美以教会で1909年7月24日「日常生活と宗教」を話すなど教会活動をした。その後、カリフォルニア大学で経済学、史学を専攻し1909年12月に卒業、1910年に文学士（Bachelor of Arts）を取得し、その年に進学した大学院で史学および政治学を学んだ。卒業後の1911年1月以降、1913年12月まで吉村神崎農園を経営した。その証拠に『新世界』等に1912年8～9月にかけて「〔砂糖〕大根切 人夫募集……場所ウッドランド」との広告を出し、何百人の日本人、ギリシャ人、メキシコ人、朝鮮人等を雇用したという。



『新世界』（1912年8月13日）

他方、「シマ農園」で高品質のポテト生産に成功した「ポテト王」牛島謹彌²〔写真〕らは「在米同胞の福利増進を以て目的」とする「同胞の自治団体」在米日本人会を1908年に設立した。この在米日本人会に書記長として関わったのが乾精末と神崎驥一であった。

乾の就任について『新世界』（1912年11月9日）によれば、世間にはこの日本人会を軽視する向きがあるが「在留同胞七万の統轄団体」で「其任務たるや極めて重大」だが内紛により書記長選任に難渋した結果、ミシガン大学在学中から「冒険家」等として活躍した乾精末の「過去」「人格」「技倆」を知悉した参事員諸氏の推薦ゆえ彼等を「信頼」し「乾

氏の御手並を拝見」とした。「お手並み拝見」を待つまでもなく乾は実質具体的な書記長としての仕事はできなかった。そのため東京帝大出の『日米新聞』記者の相良忠道が書記長に就任したが、1915年4月10日のデンバーの『コロラド新聞』によれば、はやくもその後任が課題となっていた。種々議論の末、参事員会は「適当なる候補者なき為め」に「現書記神崎驥一氏を推薦した」が、「心細き限りなり」と嘆いた。とはいえ1915年9月23日の『日米新聞』では「在米日本人改正規約 神崎驥一書記長として説明」とあり、神崎が正式に書記長として活動していた（～1921年4月）。

在米日本人会書記長としての神崎驥一が扱った課題は、(1) 排日土地法など米日本人排斥問題（歴史と現状）、(2) 日本と民主主義問題－「日本は建国来の真デモクラシー国」、(3) 写真結婚問題、(4) 在米二世の国語教育問題、(5) 移民の宗教問題、(6) 徴兵問題などであり、いずれも「在米同胞の福利増進を以て目的」とする在米日本人会の方針に添うものであった。

1920年7月24日から関西学院への神崎の帰院が報道されるなかにあっても1920年秋から須市、桜府、桑港などで巡回開催された「時局講演会」に参加するだけでなく、12月20日からニューヨーク、ワシントンで神崎は書記長として訪問している。このように日米日本人会書記長神崎は「時局に対し最も大なる責任を有する公共団体〔在米日本人会〕」の書記長としての「特殊責任ある地位」を最後まで自覚し行動した。（いのうえ たくとし）



写真 在米日本人会 1912年（『リトル・トウキョー 100年』1987より）
前列右から3人目が牛島謹彌、後列右から3人目が神崎驥一

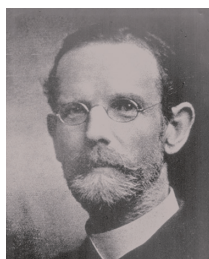
1 新聞記事は Hoover Institution Collections の「邦字新聞デジタル・コレクション、<https://hojishinbun.hoover.org/?l=ja>」に基づく。

2 山田義雄「花は一色にあらざーアメリカで「ポテトキング」と呼ばれ日本人の心を伝えた牛島謹彌一」（西日本新聞社、2008）。

関西学院 5人の院長

プロフィール

年表



初代院長 ランバス, W. R.
(在任期間 1889-1890)
Lambuth, Walter Russell Thornton
1854.11.10 生～1921.9.26 没
関西学院在職期間: 1889-1890
日本滞在期間: 1886-1890
国籍: アメリカ合衆国
担当科目: 説教、新約聖書学

1886.09.15
1886.11.24
1886.11.26
1888.08.31
1889.07. -
1889.09.28
1890.08. -
1891.01. -

日本宣教部開設、W.R. ランバスを総理に任命 (-09.17)
ランバス、家族と共に北京から神戸に到着
ランバス、居留地 47 番の英語夜間学校に読書室を併設
神戸に青年のための学校を開設することを提議
W.R. ランバス院長、J.C.C. ニュートン神学部長就任
兵庫県知事より関西学院設立認可。10.11 授業開始
吉岡美国、ヴァンダービルト大学留学
ランバス院長、アメリカへ休暇帰国



1898 年頃の吉岡

第2代院長 吉岡美国
(在任期間 1892-1916)
よしおか よしくに
1862.9.26 生～1948.2.26 没
関西学院在職期間: 1889-1916
国籍: 日本
誕生地: 京都
担当科目: 国民道徳

1892.06.15
1894. - . -
1903.11. -
1907.05.22
1909.11.23
1910.05.18
1910.06.14
1912.03.04

吉岡美国卒業、その後帰国。09.01 院長就任
ランバス、南メソヂスト監督教会伝道局総主事に就任
神崎驥一渡米
メソヂスト3 派合同、日本メソヂスト教会成立
関西学院創立 20 周年記念祝賀式
カナダ・メソヂスト教会が学院経営に参加
ランバス、エディンバラ宣教会議第2 部門議長務める
高等学部設置。04.- 高等学部長に C.J.L. ベーツ就任



第3代院長 ニュートン, J. C. C.
(在任期間 1916-1920)
Newton, John Caldwell Calhoun
1848.5.25 生～1931.11.10 没
関西学院在職期間: 1889-1897, 1903-1923
日本滞在期間: 1888-1897, 1903-1923
国籍: アメリカ合衆国
担当科目: 旧約聖書学、倫理学

1912. - . -
1915.02.11
1916.04.01
1917.03.07
1917.06. -
1919.05.02
1919.10.30
1920.04.21

高等学部の Motto として Mastery for Service を提唱
『商光』創刊。ベーツ、“Mastery for Service” 掲載
J.C.C. ニュートン院長就任、中学部長を兼任
ベーツ、関西学院を辞任、東京の中央会堂に従事
ニュートン院長、休暇帰国。1918.10.19 帰国
高等学部を大学に昇格する理事会決議
関西学院のチャペルにてランバス談話
理事会でベーツが次期院長に選出



1924 年のベーツ

第4代院長 ベーツ, C. J. L.
(在任期間 1920-1940)
Bates, Cornerius John Lighthall
1877.5.26 生～1963.12.23 没
関西学院在職期間: 1910-1917, 1920-1940
日本滞在期間: 1902-1940
国籍: カナダ
担当科目: 倫理学、時代思潮

1920.10.15
1921.05. -
1921.09.26
1923.05.15
1928.02.29
1929.09.28
1931.01.17
1932.03.07

C.J.L. ベーツ院長就任式
神崎驥一帰国、高等商業学部長に就任
W.R. ランバス永眠。10.03 告別式 (神学部講堂)
ニュートン夫妻帰国。1931.11.10 ニュートン永眠
上ヶ原で新校地移転起工式。1929.02.-03. 移転開始
関西学院創立 40 周年記念式典、永井柳太郎講演
アメリカ・カナダの両教会、大学昇格案承認
大学令による関西学院大学設立認可

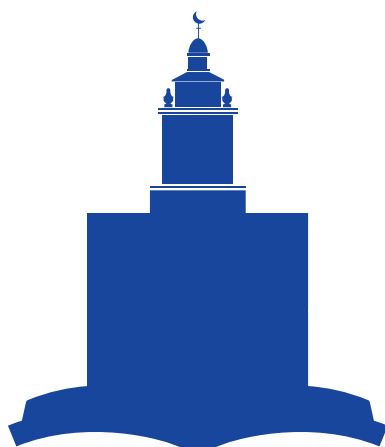


在米時代の神崎

第5代院長 神崎驥一
(在任期間 1940-1950)
かんざき きいち
1884.8.10 生～1959.4.16 没
関西学院在職期間: 1921-1950
国籍: 日本
誕生地: 東京麹町
担当科目: 経済学、米米経済事情

1940.09.11
1940.12.30
1941.02.11
1943.03.31
1944.02.17
1945.08.06
1947.04.01
1948.02.26

神崎驥一院長兼学長兼専門部長に就任
ベーツ、神戸港出港、カナダに帰国
学生会解散式、報告団結成式
専門部神学部閉鎖、日本西部神学校設置認可
教職員整理・配置転換のため全員の辞表提出を要望
空襲。09.-10. 授業再開
新制中学部開設。1948.04.01 新制大学、新制高等部設置
吉岡名誉院長永眠。02.29 学院葬 (高等商業学部講堂)



『学院史編纂室便り』第 60 号

2025.12.15 (ISSN 2436-1518)

関西学院大学 学院史編纂室
〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL: 0798-54-6022

<https://ef.kwansei.ac.jp/archives> (日本語)
<https://ef.kwansei.ac.jp/archives/history> (英語)

